

第156回 令和8年1月16日（金）

「学問の神様について。」

日本三大怨霊を知っていますか？彼らは歴史や伝承の中で怨霊として語り継がれ、時に自然災害や厄災と結びつけられました。

1人目は崇徳上皇（すとくじょうこう）です。平安時代の天皇で、父は鳥羽天皇と言われていますが、父からは憎まれていました。一説には祖父が本当の父親であると言われており、父から「叔父子」と呼ばれて疎まれていたとされています。

保元の乱（1156年）の結果、敗北し讃岐国（現在の香川県）へ流罪となりました。流罪地で孤独な生活を強いられた崇徳上皇は深い恨みを抱き、死後に怨霊化したと言われています。上皇は最期に「怨霊となり、天皇家を滅ぼす」という呪詛を残したとされ、長く恐れられていました。

崇徳上皇の怨霊の力は、火災や疫病、戦乱を引き起こしたとされており、日本中に厳しい災いをもたらしたと信じられました。平家滅亡は崇徳上皇の怨霊によるものとする伝承もあります。

2人目は平将門（たいらのまさかど）です。平安時代中期の武士。関東を中心に活動し、「新皇」と名乗り、朝廷に反旗を翻しました。将門は関東で反乱を起こしたものの朝廷軍に敗北し、首を切り落とされ処刑されました。死後、その首は京都から関東に運ばれたとされ、「意識を持った状態で首が飛び回り怨念を放った」という伝説があります。

平将門を祀る「将門塚」（東京都千代田区）が存在し、供養を怠ると災いが起きるといいます。関東大震災（1923年）も「将門の怒り」だと信じる人もいました。

3人目は菅原道真（すがわらのみちざね）です。平安時代の学者・政治家で優れた学問の才能を持ち、「天神様」として祀られていましたが、現在は学問の神として親しまれています。

道真は藤原氏によって政争に巻き込まれ、不遇の末に大宰府（現在の福岡県）に左遷され、悔しい思いのまま亡くなりました。死後、道真の怨霊が京都で地震、落雷、火災、疫病などの災厄を引き起こし、朝廷は恐れ珍重するようになります。

菅原道真の霊は「天神様」として祀られ、災厄を鎮めるために北野天満宮（京都）や太宰府天満宮など多くの天満宮が建立されました。

東京の湯島天神もそうですが、いまや菅原道真は「学問の神様」として多くの受験生がお参りに行きますね。みなさんやご家族の方で絵馬を奉納した方もいるかもしれません。

さて3年生はいよいよ共通テストが始まります。今日はゆっくりと睡眠をとって、万全の体調で臨んでください。日ごろからがんばっているみなさんのことを心から応援しています。

最後まであきらめず、悔いのないよう全力を尽くしてください！！